

西真寺 寺報

平成三十年 秋号

■ 親鸞聖人と戒律③

住職のつぶやき

先日は前住職、前坊守の三回忌の法要に御参詣なラビに御厚志を賜り、誠に有難うございました。この度の法要に際しては、二人の

お子さんで生まれて数か月で亡くなられた「釋妙真」の四十七回忌も併修させて頂きました。四十六年前の前住職と前坊守の深い悲しみに思いを馳せると、いくら短いのちであつても、いくら短い時間であつてもお互に愛情を育んだ過程があつたと感ります。

三人の思いに耳を澄ましたら、次の言葉に出遭いました。

「どのようなつらい別れであつても、一人ひとりの人生に生まってきた意味がある。人は愛する人と死別した後で、はじめてその人の愛に気づき、その人から受けた愛情が自分の心の支えとなつて行く。愛する人を亡くして流した涙を、幸せの種に注ぐことが出来れば、いつかきっと幸せの花を咲かせることが出来るに違いない」

(鍋島直樹)

仏教には「種子生現行 現行薦種子」という言葉があります。これはたらき(本願)を示しています。例えば、遺伝子の異なる夫婦でもお互いに影響し合い、お香の匂いがお互いの心身に染み渡るようになります。お互いの成長を支える「種子」となるのです。

先代の夫婦とその子が残してくれた西真寺とご門徒の皆様方との縁を「種子」として、「お互いの幸せを育み、お互いが幸せの花を咲かせる関係性をこれからも築いてほしい」という願いに満ちた法要がありました。

合掌

釋直徳

もともと肉食を主としていたイノードに侵食した遊牧民アーリア人は、支配力を強化し、その聖性を高めるために、菜食主義となり、牛をシンボルとして、その屠畜を禁止し、肉食を禁忌化して自らを神格化していったのです。聖なる征服者は、性交・死・出産・経血・排泄行為という生命現象に対し、「穢れ」の徵として排除し、カーストという差別を生みました。

バラモン教が全盛だった時代、釈尊は、バラモンの僧侶の権威を否定し、厳格な戒律と心身の苦行によつて神と一体化することを真の悟りに達するバラモンの実践と差別を否定し、中道を説いたのです。

釈尊は、生まれや姓に限らず「四姓平等」「万人成仏」を説きました。しかし、当時バラモン教が全盛の頃であり、カースト内外の信者を多く抱える立場上、一定の「秩序性」を保持した上で教えを強化するために必要な「戒律」が必要であったのです。戒律を保持し、血統より行為の正しさを証明する意図があつたのです。この為、釈尊は涅槃に入る際、ある程度仏法・ダンマの「本質」が理解された状況を見立て、「少々の戒律箇条は廃して良い」と言つたと考えられます。

親鸞聖人は、殺生を生きるための生業としていた人たち(漁師、漁民、屠児)、と一緒に、イデオロギー操作を原初に持つ、与えられただけの戒律や差別支配に縛られることのない根源的本質に目覚めていつた凡夫がありました。親鸞聖人が、修行僧の頃、北条家に招かれた一切経の校合の後の酒宴の際、当時九歳の北条時頼から、他の僧侶は魚肉を食べる時袈裟を脱いで食べているのに貴

方だけなぜ脱がないのかと尋ねられ、生き物のいのちを頂き深い感謝と成仏を願う為、袈裟は諸仏の悟りを示す標識だと答えたそうです。

権威構造を持つ比叡山で二十五年間戒律を体現した親鸞聖人の沙弥として示された生き方には、人間の根本的生命現象に寄り添う姿が映し出されます。そして、人間をいくら聖性化しても、そこに驕慢な差別意識があることを気づかせてくれます。

■脳死の問題と仏教③

そもそも西洋医学の発展の背景には、デカルトの心身二元論があります。「我思ゆえに我あり」とする、自我意識や理性を絶対化する考え方の基本には、「心と身体」を分け、「私抜きの知」として、客観的に物質である他人の身体を観察することで、身体を持つ機械的な原理を解明しました。

この基本的な人間観が、近代医学の発展に寄与したことは間違いません。しかし、一方「傍観者の知」であるがゆえに、人類は、地球の自然を支配し、征服することで温暖化や環境破壊を引き起こし、原爆を投下する結果にもつながりました。

デカルトの示した「私の死を抜いた知」という二分した人間觀は、果たして私たち日本人が培ってきた死生觀に対し、腑に落ちる生死のあり方を尊重する「知」を示しているのでしょうか。脳死の妊婦が元気な赤ちゃんを産んだ例などは死体である物質から生命を取り出す行為であり、全く理解できない「知」のあり方を示しています。

私たちの先祖を十代遡れば、千人のいのちが関わっている真実

と同様に、ことものいのちは、遡れば連綿と「つながり合う賜つたいのち」なのです。その「賜つたいのちからの声を聞く」ことが「念佛」です。一人のことものいのちの背後には、量ることのできない「いのち」、すなわち「無量寿」があることに気づく事が、亡き人達の願いに応えていく生き方に繋がります。

仏教では、心身一如であり、賜つたいのちであります、この思想は、「病は氣から」や「子どもは授かりもの」として表現され、東洋医学では、心と身体の均衡が崩れることから病が生じるとされています。武村牧男は、「二つの個体は、身体と精神（種子はその因である）と環境とを合わせたものなのである。換言すれば、身体（器官）を焦点に、主体と環境世界とが交渉する、その相対が一個の生命なのである」（『生命—その始まりの様式』）と述べています。

私たちは、潜在的な心でものことを捉えています。その無意識がもたらす「識」とは、「身体」と「精神」と他者を含めた「環境」が同時交互に転変する潜在的なダイナミズムの根柢であり、人が成長し、人格を形成していく個の過程の根源であります。脳死の判定はこの人間の潜在的能力であるこころと身体（主体）と他人との関わりが相互的に作用する「個体化（個性化）の過程」つまり人間が眞の人間になろうとする「全体のはたらき」を無視し、その「内的な体現過程」を阻む考え方であります。

合掌

■西真寺 行事のご案内

報恩講

十月十四日(日曜日)

京都本山参拝旅行 平成三十一年十月末予定
日程行程等決まり次第随時報告します